連載 第三回

狂人語り・寓喩・異世界

芥川龍之介「河童」をめぐる三つの問い
――（三）異世界――

池上貴子

はじめに

芥川が近代文学の終焉であり、現代文学始まりの作家であったというその意味は、作品で語られる〈物語〉を、語り手自身さえもが信じられないまま構築あるいは補強していく、虚構に満ちた言語の実験、戯れが読み取れるからだ。一章から援用している「蜃気楼」や、「歯車」などはその最たる例だが、「河童」もまた、〈言語という不確かなモノで構築された《物語》を共有する作品〉として考えた時、極めて現代的な作品だと思わされる。おそらくその現代性の一端は、「河童」の〈物語〉が「異世界」という領域を創り出したことと深く関わっている。ファンタジーに慣れた我々の頭が勝手に了解している、〈異世界へ行く〉という行為。異世界作品がなぜ要請されたのかということを、改めて考えてみなければならない。〈異世界〉はなぜ選ばれたのか。

「河童」論の最終回にして〈異世界〉という要素を考える主な理由は、現代のウェブ小説における日本独自のジャンル〈異世界転生・異世界転移のファンタジー〉（以下、〈異世界ファンタジー〉と呼ぶ）とのある接続が認められるからだ。したがって本稿は、現代の異世界ファンタジーに展開する〈異世界〉の構造を援用しつつ、「河童」を読んでみたい。

ちなみに、本稿にいう〈異世界〉とは、現代日本から転移・転生した〈視点人物にとっての異世界〉のことである（幻想文学ジャンルのハイファンタジー・ローファンタジーのように、視点人物が世界間の移動をしない〈読み手にとっての異世界〉ではない）。或る日突然死んだり瞬間移動したり召喚されたりして〈異世界〉に飛ばされる視点人物たちは、人種や国籍の違いといったカルチャーショックを遙かに飛び越えて、突然〈世界が交換された〉という感覚をほぼ共通して抱きながら、あまり混乱も絶望もしない。また、語り手そして読者も、この世界交換の感覚を、ほぼ始めから物語の約束事として読み流していくのである。

このように、〈物語〉の奇妙な前提（お約束＝テンプレート）の共有や、異世界に渡った主人公の殆どがなぜか獲得する無双状態の能力、いわゆる〈異世界チート〉という属性については、管見ながらまとまりをもったテクスト分析的な論文は殆どなく、あくまでウェブ上[1]でやや感情的かつ流動的に批判されてきた感がある。しかし、なぜ異世界ファンタジーという〈物語〉や〈チート〉という属性が、現代小説の装置として選ばれていくのかという問いは、ステレオタイプなキーワードである〈多様性のなさ[2]〉という答えで片付けていいものではない。そもそも言語文化の層ともいえる〈物語〉の型を取り込み、それと戯れる僅かな欲望もなしに新しい〈物語〉は語れるものだろうか。〈オリジナル小説〉・〈真の文学作品〉なる概念を問うたことこそ最晩年に芥川がみせた小説家の本領ではなかったか。

一．異世界ブームの時代背景―大正・昭和・そして現代―

異世界ブームは確かに時代ごとに起こってきた現象だったが、現代の〈異世界〉への志向は明らかにそれらと性質が異なる点をまず踏まえておく必要がある。少々迂回するが各時代の異世界ブームを鳥瞰しておきたい。

たとえば芥川の生きた大正期、異世界への興味関心は「河童」の「十五」で「僕」が読む「心霊学協会雑誌」の場面に描かれている。インチキをあからさまに匂わせる霊媒師ホツプ夫人による自殺した友人トツクの交霊実験とそのメディア化は、明治末期に現れ、大正当時に確立されつつあった心霊科学という分野の不穏さをよく捉えていて興味深い。

明治四三年、東京帝国大学教授の福来友吉と京都帝国大教授の今村新吉による御船千鶴子の透視能力実験や、後の東京帝国大学内で行われた公開実験を中心に、三人の女性の透視や念写実験が誌面をにぎわせた「千里眼事件」があった。後に東大を追われ在野に下った福来は、信念を曲げず、大正二年八月に東京宝文館から研究の成果を『透視と念写』にまとめ出版している。この福来と明治二九年に東京帝国大の同期だったのが、新宗教「大本」を支え「大本事件」の中心人物となり、後に心霊科学（スピリチュアリズム）を日本に確立させた浅野和三郎である。実は芥川が務めた海軍士官学校英語教官の前任者がこの浅野であった。芥川と浅野双方が帝国大学で小泉八雲の講義に影響を受けており、当然ながら八雲の怪異譚の愛読者でもあった。

このように、大正期の芥川は、昔話の物語に展開する異世界譚を好む一方で、時代の要請により出現した虚構をエンターテイメント的に消費する〈異世界〉の空気を同時に吸収していたといえよう。「侏儒の言葉」にいう「神秘主義」